唐代傳奇「任氏傳」における狐の怪異の語り

葉山恭江

はじめに

唐代傳奇は、創作された小説として中國文學史に位置づけられ、中でも男女間の愛情を描いた話はよく知られている。そこには、科擧受驗を控えた若者と、琴の演奏や詩作の才も備えた美女という一組の男女の戀愛、いわゆる「才子佳人」の物語が描かれる。そうした例として、中唐に成立した諸作、「鶯鶯傳」の張生と鶯鶯、「柳氏傳」の韓翃と柳氏、「霍小玉傳」の李益と霍小玉などを擧げることができる。

本稿で取り上げる「任氏傳」[1]は、『太平廣記』卷四五二「狐」六に「任氏」として收錄され、盛唐の沈既濟撰とされている。この「任氏傳」も、男女の愛情物語として讀むことが可能であるが[2]、先に擧げた「才子佳人」の物語とは異なる特徴を持っている。それは、人間世界にあやかしが現れて人と交わるという怪異の要素を持つ點や、物語の中心となっているのが一組の男女の話ではない點である。

この二點について、「任氏傳」の冒頭を示して、本論の問題提起を述べたい。

任氏、女妖也。有韋使君者、名崟、第九。信安王禕之外孫。少落拓、好飲酒。其從父妹壻曰鄭六、不記其名。早習

武藝、亦好酒色。貧無家、託身於妻族。與崟相得、游處不閒。

（任氏は女の妖しである。韋使君という者がいて、名は崟、排行は九番目。信安王褘の外孫である。若いときから放蕩し、飲酒を好んだ。その年下の女いとこの壻は鄭六と言うが、その名は記さない。若いときから武藝を習い、これもまた酒や色を好んだ。貧しくて家がなく、妻の親族に身を託していた。崟と打ち解けて、いつも一緒に遊んでいた。）

まず、「任氏は女妖なり（任氏、女妖也）」とあるとおり、美女任氏がじつは狐の化け物であったことが最終的に明らかとなる話である。これは、「鶯鶯傳」「柳氏」「霍小玉傳」の女たちがふつうの人間であるのとは異なっている。「任氏傳」のように、狐が美女に化けて人間の男に接觸するという説話は六朝志怪にあり、[3] 任氏が狐女だという設定はその影響を受けていると考えられる。しかし、それだけでは「任氏傳」という物語において任氏が狐であることの意味は十分に明らかとは言えない。

また、「任氏傳」の作中人物の主な者は、任氏という女と、鄭六と韋崟という男二人である。この三名の關係は、鄭六と韋崟は親戚筋にあたる遊び仲間である。また、任氏は鄭六と出會ってその妾となるが、任氏の生活費を韋崟がすべて出している關係にある。さらに、鄭六と韋崟の二人はストーリー上において、時に一緒に場面に登場するが、多くは場面ごとに入れ替わるように登場し、任氏と二人の男の物語として構成されている。

「任氏傳」がこのような物語になっていることから、何が讀み取れるだろうか。任氏が「狐」であるという怪異は、「任氏傳」にどのように物語として描かれているのだろうか。また、なぜ、美女任氏一人に對して、鄭六と韋崟という二人の男が設定されているのだろうか。これらの疑問を、物語論[4]の「語り手」や「視點（焦點化）」の概念を用いて檢討することを通じて、「任氏傳」の表現方法の一端を明らかにしたい。

一、「任氏傳」の語り手沈既濟

本章では「任氏傳」のあらすじおよび終わりの部分を示して、この物語の「語り手」[5]と、その語り方について確認したい。まず、あらすじを述べるが、主な作中人物は、任氏と韋崟と鄭六である。

韋崟は、貴族の家柄でお金持ちだが、その親戚すじの鄭六は貧乏で、妻の家の財産に頼って生活している。韋崟も鄭六も酒と女が好きで、長安を二人で遊び歩いている。ある日、鄭六が一人で街中にいた時に美女任氏と出會い、そのまま一夜を過ごしたのだった。後日、任氏と再會した鄭六は、任氏を妾として住まいを構えることにした。そこで鄭六は、韋崟に家財を借りに行く。鄭六が美女を手に入れたと韋崟は聞いて、その美貌を確かめようと鄭六の新居へ出向く。そこで目にした任氏の美しさに、韋崟は思わず襲いかかるが、任氏は抵抗し道理を述べて拒み通したので、事なく終わった。それからは、任氏は韋崟に生活費をすべて出してもらい、お返しに韋崟好みの美女との仲をとりもったりする。一方で、任氏は鄭六に一途に仕え、時に助言をして馬の賣買でお金儲けをさせたりする。のちに、鄭六は武官を授かり、長安の西の赴任先へ任氏を誘う。ところが、任氏は西は方角が悪いからと言って拒む。鄭六と韋崟は二人がかりで説得し、結局任氏はそれに從って旅立った。その旅の途中で任氏は犬に襲われ、狐の姿を現して死ぬ。旅から歸った鄭六から、韋崟は任氏についての顛末を聞き、最後は二人で任氏の墓を確認した。

任氏たちの話は、以上のようなものである。ただし「任氏傳」自體には續きがあり、この任氏の話は、韋崟から沈既濟が聞いた話であることが、終わりの部分で語られている。

大曆中、沈既濟居鍾陵、嘗與崟遊、屢言其事、故最詳悉。後崟爲殿中侍御史、兼隴州刺史、遂歿而不返。

（大暦年間に、沈既濟は鍾陵に住み、かつて崟と交遊したが、しばしばその事を言っていたので、最も詳細を極めている。後に崟は殿中侍御史となり、隴州刺史を兼ねたが、ついに亡くなって戻らない。）

沈既濟は崟と交遊があり、崟が「その事」つまり任氏の話をしたので、既濟は詳細に知っているという事情が讀み取れる。これに續けて、沈既濟が以上の話を記した經緯が語られて「任氏傳」全體が終わりとなる。

建中二年、既濟自左拾遺於金吾將軍裴冀、京兆少尹孫成、戸部郎中崔需、右拾遺陸淳、皆謫居東南、自秦徂吳、水陸同道。時前拾遺朱放、因旅遊而隨焉。浮潁涉淮、方舟沿流。晝讌夜話、各徵其異說。眾君子聞任氏之事、共深歎駭。因請既濟傳之、以志其異云。沈既濟撰。

（建中二（七八一）年、既濟は左拾遺から、金吾將軍の裴冀、京兆少尹の孫成、戸部郎中の崔需、右拾遺の陸淳とともに、皆東南に謫居せられて、秦から吳へ行き、水陸の道をともにした。時に前拾遺の朱放が、旅遊していたので隨行したのである。潁水に浮かび淮河を渉り、方舟で流れに沿った。晝に宴會をし夜に談話をし、それぞれに變わった話を披露した。衆君子は任氏の事を聞いて、共に深く歎駭して、既濟にこのことを傳するように賴んだので、異を記したのである。沈既濟撰す。）

「既濟」が五名の「衆君子」（裴冀・孫成・崔需・陸淳と、朱放）に「任氏の事」を話したところ、それを聞いた「衆君子」から「傳」するよう賴まれたので、「異」を記錄したと述べている。こうして「任氏傳」が結ばれることから、「任氏女妖也」から始まった物語を語り進めてきた「語り手」は沈既濟であることが讀みとれる。

この語り手「沈既濟」は、韋崟が話した任氏の物語には登場していない。沈既濟が韋崟と交遊した時點には、すでに任氏たちの物語は終わっていたからである。しかし、その物語を傳聞し記錄する者として「既濟」という名を表して作中に登場している點で、「沈既濟」もまた作中人物である。ただし韋崟や任氏とは異なる層にある作中人物と言える。

また作中人物であることと、語り手の機能は切り離して考える必要がある。

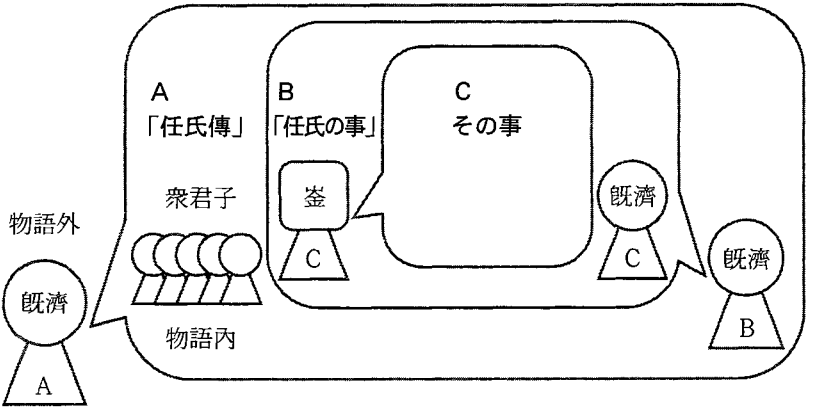
つまり、圖1に示すように、Aは語り手既濟が語る「任氏傳」の全體、Bは既濟が衆君子に語った「任氏の事」、Cは崟が既濟に語ったその事（狐の任氏の話）」といういわば入れ子の狀態となっている。このように確認すると、「任氏傳」大半を占める「狐の任氏の話」の出所が「韋崟」であることが見て取れる。しかし次に、語り手がどの視點から語っているかを檢討してみると、沈既濟の語っている韋崟が見聞した內容には、さらに別の人物の見聞が混じっていることが明らかとなる。

二、語り手の視點

（一）鄭六の視點からの語り

それでは、「任氏傳」の語り手沈既濟は、どのような視點から任氏の物語を語っているだろうか。ここでは、ジェラール・ジュネットの「焦點化」という考え方[6]を用いて整理してみたい。「焦點化」は、誰が語り手として語っているかということと、語られているその場面は誰が見たものかということを區別する考え方である。

圖1



「任氏傳」における語り手沈既濟の語りの視點について明らかにするために、まずは、鄭六（鄭子）が「白衣（任氏）」と初めて出會う場面を檢討する。

崟與鄭子偕行於長安陌中、將會飲於新昌里。至宣平之南、鄭子辭有故、請間去、繼至飲所。崟乘白馬而東、鄭子乘驢而南、入昇平之北門。偶値三婦人行於道中、中有白衣者、容色姝麗。鄭子見之驚悅、策其驢、忽先之、忽後之、將挑而未敢。白衣時時盼睞、意有所受。

（崟と鄭子は一緒に長安の街中を行き、ちょうど新昌里に集って飲もうとしている。宣平の南に至ると、鄭子は用事があると斷り、時間をもらって別れて、後から飲の場へ行こうとする。崟は白馬に乘って東へ行き、鄭子は驢に乘って南へ行き、昇平の北門を入った。たまたま三人の婦人が道を行くのに出會ったが、その中に白い着物の者がいて、容姿は端麗である。鄭子はこれを見て驚きよろこんで、自分の驢に鞭打ち、女たちの前に出たり、後に付いたり、氣を引こうとしてまだできずにいる。白い着物の者は、時々流し目をよこしたりして、氣がありそうである。）

この場面では、はじめに韋崟と鄭六の二人が登場するが、二人が夜の飲み會を約束して別れた所からは、鄭六の行動を追っていく。鄭六はロバに乘って南に向かい、昇平の北門を入ったところで、三人の婦人が道を行くのに「出會った（値）」とあることから、語り手の視線が作中人物である鄭六の視線にそっていることが讀み取れる。續いて、婦人が三人いる中の、白い着物の婦人が美人であるのを鄭六は「見」てびっくり喜んで、聲をかけようか迷っているという部分からも、鄭六の「見」るという視覺に添っている語り手の視點が讀み取れる。さらに、女の樣子が「氣がありそう（意有所受）」だというのも、語り手が鄭六の視點で語ったものである。つまり、女に出會ったのも、見たのも、氣がありそうだと判斷したのも鄭六と讀み取れ、鄭六が見たもの感じたものがここに語られている。

また、この場面が、作中人物「鄭六」の視點から語られていることは、地の文における人物呼稱の變化からも讀み取

れる。鄭六がここで初めて出會った名も知らない美女は、名前では呼ばれず「白衣（白い着物の人）」と呼ばれている。ところが、このあと鄭六は白衣の美女について行き、立派な屋敷の前に着いた場面では、その呼稱が變化する。

鄭子隨之、東至樂遊園、已昏黑矣。見一宅、土垣車門、屋宇甚嚴。白衣將入、顧曰「願少踟躕。」而入。女奴從者一人、留於門屏間、問其姓第。鄭子既告、亦問之、對曰「姓任氏、第二十。」少頃、延入。鄭縶驢於門、置帽於鞍。始見婦人年三十餘、與之承迎。卽任氏姊也。列燭置膳、舉酒數觴。任氏更衣理粧而出、酣飲極歡。

（鄭子は女たちに從って、東の方樂遊園に着いたときには、すでに暗くなっていた。屋敷が見え、土塀に車寄せの門があり、建物の軒も莊嚴である。白い着物の婦人は中に入ろうとして、振り返り「少しお待ち下さいね。」と言って入った。召使いの女が一人、門屏のわきに留まって、鄭子の姓第を尋ねた。鄭子が答えてから、女の方へも尋ねると、「姓は任氏で、第は二十です。」と答えた。しばらくして、迎え入れられた。鄭は驢を門に繫ぎ、被り物を鞍に置いた。始めに三十歳餘りの婦人を目にし、鄭子は迎えられたが、これは任氏の姉である。蝋燭を列ねて膳を置き、酒を數杯勸めた。任氏は化粧を直して出てきて、心ゆくまで飲んで樂しんだ。）

屋敷に着いて「白衣」は、鄭六に少し待つように言って先に中に入っていく。鄭六は外で待つ間に「白衣」の召使いに名乘り、「白衣」が「任氏」である事を知る。このようにお互いの姓第を交わした後で、女の呼稱が「白衣」から「任氏」へと變わる。これは、語り手が鄭六の視點に添って語っている事を示している。こうして白衣の美女は「任氏」と呼ばれるようになり、物語の終わりまで「任氏」と呼ばれる。

このあと任氏と一夜をともに過ごした鄭六は、翌朝に屋敷から出る。早朝だったため長安城内の房の門はまだ開いておらず、鄭六は門の近くの路地で餅を賣っていた胡人と雜談をする。

鄭子指宿所以問之曰「自此東轉、有門者、誰氏之宅。」主人曰「此隤墉棄地、無第宅也。」鄭子曰「適過之、曷以云

無。」與之固爭。主人適悟、乃曰「吁、我知之矣。此中有一狐、多誘男子偶宿、嘗三見矣。今子亦遇乎。」鄭子赧而隱曰「無。」質明、復視其所、見土垣車門如故。窺其中、皆蓁荒及廢圃耳。

（鄭子は昨晩泊まったところを指さして尋ね「ここから東に曲がったところに、門があるのは、どなたのお屋敷だい。」と言った。（胡人の餅賣りの）主人は「ただ崩れた垣に空き地で、屋敷なんぞありません。」と言う。鄭子は「訪ねてきたばかりなんだ、無いはずがない。」と主人としばらく言い爭った。主人ははたと分かって「ああ、わかりました。そこには狐が一匹いて、よく男を誘って共寢するので、これまでに三度見ましたよ。今あなたも會いましたか。」と言ったので、鄭子は赤くなって隱して「いいや。」と言った。夜が明けて、再びその場所をよく見たところ、土塀や車寄せの門は元のようであるのが見えたが、中をうかがい見ると、まったくの荒れ地荒れ畑だけである。）

鄭六はここで餅賣りの主人からもたらされた情報によって、その邊りに男を騙して寢る狐が出ることを知った。また、昨晩泊まったはずの屋敷は存在せず、そこは荒れ地であることも鄭六自身の目で確かめたことが語られている。つまり、この場面で鄭六は美女任氏が狐であることに氣付くのである。

ここまで、作中人物鄭六の視點が語り手の語りに表れていることを確認してきた。「任氏傳」の冒頭は「任氏は女妖である」から始まり、鄭六と任氏の初對面の一夜が明けた時點（任氏の物語全體から見ると始めの五分の一ほど）で任氏が狐だということが讀者に種明かしされてしまっている。しかし、「任氏傳」は續けて語られていく。その過程には、鄭六以外の任氏を狐だと知らない作中人物の視點が讀み取れる語りが表れる。このように語りの視點が變わることは「任氏傳」の全體構成にどのような效果を及ぼしているだろうか。

（二）韋崟の視點からの語り

ここからは、「任氏傳」の語りに表れた作中人物韋崟の視點を檢討していきたい。

前章にすでに檢討した鄭六が任氏と出會った翌日の場面である。

既歸、見崟。崟責以失期、鄭子不泄、以他事對。

（そのまま歸って、韋崟に會った。崟は約束を違えた事を責めたが、鄭子は漏らさずに、他のことを答えた。）

鄭六は任氏と過ごした一夜が明けて歸り、韋崟と會ったが、任氏のことを話さなかった。

その後、韋崟が任氏の存在を知るのは、任氏と鄭六が再會し、二人の住まいを構えることになったときである。[7] しかしこの時も、韋崟は人間の美女としての任氏に出會ったのみである。

それでは、韋崟は任氏が狐であることをいつ知ったのだろうか。それが讀み取れるのは物語の終わり近くで任氏が死んだ場面である。

鄭子武調、授槐里府果毅尉、在金城縣……旬餘、鄭子還城、崟見之喜、迎問曰「任子無恙乎。」鄭子泫然對曰「歿矣。」崟聞之亦慟、相持於室、盡哀。徐問疾故、答曰「爲犬所害。」崟曰「犬雖猛、安能害人。」答曰「非人。」崟駭曰「非人、何者。」鄭子方述本末、崟驚訝嘆息不能已。

（鄭子は武官として取り立てられ、槐里府の果毅尉を授かった……十日餘りして、鄭子が長安の町に戻ってきたので、崟はそれ見て喜んで迎えて「任氏は元氣か。」と尋ねた。鄭子は涙を流して「亡くなったよ。」と答えた。韋崟もこれを聞いて慟哭し、室内で互いに支え合って、哀しみ盡くした。徐々に何の病だったかと尋ねると、「犬に殺されたんだ。」と答えた。崟が「犬がどう猛だと言っても、人を殺すことはあるまい。」と言うと、「人ではないのだ。」と答える。崟は驚いて「人でなくて、何なのか。」と言うと、鄭子はそこでやっと、事の顛末を述べて、崟は

驚き訝しんでため息をつくばかりだった。）

ここで、「韋崟が鄭六が戻ったのを見て喜んだ（崟見之喜）」とあるところに、鄭六の歸りを待っていた韋崟の視點が表れている。さらに、韋崟は鄭六から任氏が亡くなったと聞いて驚き、しかも任氏は人でないと聞かされて一層驚いて嘆いている。この後、二人は共に任氏の墓を確認に出向く。

明日、命駕與鄭子俱適馬嵬、發瘞視之、長號而歸。追思前事、唯衣不自制、與人頗異焉。

（明くる日、馬を命じて鄭子と一緒に馬嵬へ行き、墓を掘り起こしてそれをよく見て、長いこと声を上げてなげいてから歸ってきた。前の事を思い返せば、着物を自分で縫わないことだけが、人とたいへん違っていたのだ。）

このように、韋崟は「鄭六と一緒に（與鄭子俱）」に出かけ、墓を掘ってそこを「よく見（視）」ている。この「視」るという語に、韋崟の視點を讀とることができる。また「前の事を思い返せば、（追思前事）」というのは、物語内の次のエピソードを指しており、これも韋崟が登場している場面である。

任氏又以衣服故弊、乞衣於崟。崟將買金綵與之、任氏不欲、曰「願得成制者。」崟召市人張大爲買之、使見任氏、問所欲。……竟買衣之成者、而不自紉縫也、不曉其意。

（任氏はまた衣服が古くなり破れたので、崟に衣服をねだった。韋崟はあやぎぬを買い與えようとしたが、任氏は欲しがらずに、「縫い上がった物を欲しい。」と言った。崟が商人の張大を呼んでそれを買ってやろうとし、任氏に會わせて欲しい物を尋ねさせた。……結局、縫い上がった着物を買って、自分で縫い物をしなかったが、その理由は明らかでない。

韋崟は任氏に着物を買い與える時に、縫い上げ前の反物を買ってやろうとしたが、任氏は縫い上がった着物を買って、「自分では縫い物をしなかった（不自紉縫也）」。その理由が明らかでないと語っている。この場面の語りを受けて、任

氏が亡くなった後では、そういえば以前に「着物を自分で縫わなかった（衣不自制）」と回想し、この着物を縫わないことのみが、一般の人とは違っていたと感じられるところだと語られている。つまり、「人ではない」という證據として、着物を縫わないことが示されている。

着物を縫わなかったエピソードにおける「不自紉縫也、不曉其意」と、任氏が狐であったことを確かめた場面での「追思前事、唯衣不自制、與人頗異焉」は、いずれも地の文であり、語り手が語っている言葉である。しかし、ここに表れている視點が誰のもので、誰の判斷を表現しているかを考えるならば、これらの場面に共通する登場人物であり目擊者である韋崟の見た物事や判斷が表現されていると言える。着物購入のエピソードでは、鄭六は登場せず、韋崟が目擊した出來事となっている。したがって、この場面での語り手は、韋崟への焦點化によって、韋崟の感覺を通じてそこに語り手の見解を重ねる形で語っているのである。

以上のように、任氏の墓を確認した場面には、韋崟と鄭六が一緒に登場してはいるが、着物購入のエピソードに注目すると、韋崟の視點が強く表れていることを確認した。

「任氏傳」において、韋崟と鄭六は一緒に登場する場面もあるが、多くは二人が入れ替わるように交互に登場している。次はこのことについて檢討し、二人のエピソードがどのように組み合わされて「任氏傳」として成り立っているかを述べたい。

三、交互に登場する鄭六と韋崟

この章では、「任氏傳」のプロット（物語が語られた順序）について整理することから始める。次いで、任氏に關し

て、鄭六と韋崟はそれぞれどのような面を知っていたかを検討する。

（一）任氏に關わるプロット

「任氏傳」の中で、任氏に關する物語のプロットを以下の（1）～（9）に分けて示す。そのうえで、それぞれのプロットに鄭六や韋崟が登場しているか、任氏のどのような面が語られているかを確認する。

（1）鄭六は任氏と出會い、一夜を過ごす。

（2）鄭六は任氏と再會し、任氏は鄭六の妾になる。

（3）韋崟は鄭六の新居を訪ね、任氏を襲いかけるが、任氏は拒み通す。

（4）任氏は韋崟に好みの美女との仲を取り持つ。

（5）任氏は鄭六に馬を賣買させ、大金儲けをさせる。

（6）任氏は韋崟に着物を買ってもらう。

（7）鄭六が武官として西へ赴任する際に、任氏は西への旅は方角が惡いと拒むが、鄭六と韋崟で說得し、任氏は從う。

（8）鄭六の旅に同行した任氏は狐に戻って犬に追われて死ぬ。

（9）韋崟は鄭六と任氏の墓を確認する。

これらのプロットに任氏は一貫して登場するが、鄭六と韋崟は概ね交互に登場している。プロットの內、鄭六が登場するのは（1）（2）（5）（7）（8）（9）、韋崟が登場するのが（3）（4）（6）（7）（9）、鄭六と韋崟が一緒に登場するのは、プロットの（7）と（9）である。このように、鄭六と韋崟が交互に登場していることにより、鄭六から見た任氏と、韋崟から見た任氏とでは、見えている面が違っていることが考えられる。また、鄭六と韋崟が共に登場す

る場面では、お互いが見た任氏についての情報共有が行われるのではないだろうか。この點を以下に檢討していく。

（二）鄭六から見た任氏の特徴

プロットの（1）の內容は、すでに第二章（一）「鄭六の視點からの語り」で檢討したとおりだが、鄭六は任氏の屋敷に立ち寄って一夜を過ごした後、その邊りに男をだます狐が出ることを餅賣りの胡人から聞き、さっき通った任氏の屋敷が荒れ地である事を確かめている。このように鄭六は、任氏が狐の化け物であることを、知り合った翌朝には氣がついていた。

「任氏傳」は『太平廣記』の「狐」部に入っているが、同卷四四七「狐」一「說狐」（出『玄中記』）は妖狐のイメージを傳えるものである。

狐五十歲、能變化爲婦人。百歲爲美女、爲神巫、或爲丈夫與女人交接。能知千里外事、善蠱魅、使人迷惑失智。千歲卽與天通、爲天狐。

（狐は五十歲で、化けることができて婦人となる。百歲で美女となり、神巫となり、あるいは男となって女と交接する。千里の外の事を知ることができ、蠱魅を得意とし、人を惑わして知性を失わせる。千歲になると天に通じ、天狐となる。）

ここに記されている妖狐の特性のうち、「任氏傳」の任氏に當てはまるのは次の三點である。①美女に化けている點、②物事をよく見通すことができる點（能知千里外事）、③まじないを得意とする（善蠱魅）點である。

このうち、①と②は、主に鄭六が登場する場面に讀み取ることができる。

まず、①美女に化けている點について、任氏が美女であることは、プロットの（1）で鄭六が任氏を初めて見かけた

際に「容貌はことさら麗しい（容色姝麗）」と語られているが、このときの鄭六は、任氏を狐だとはまだ思っていない。しかし、この初對面で一夜を過ごした翌朝に鄭六は任氏が狐であると知ったので、プロットの（2）で二人が再會したときには、鄭六は任氏が狐が化けた美女だと分かって近づいている。その任氏の様子は「任氏が眸をめぐらし扇をよけると、光輝く麗しい様は以前の様である（任氏乃廻眸去扇、光彩艶麗如初）」と表されている。

さらにプロットの（8）では、鄭六の赴任の旅に同行した任氏は犬に出くわして狐の姿を現してしまう。

適値於道、蒼犬騰出於草間。鄭子見任氏欻然墜於地、復本形而南馳。蒼犬逐之、鄭子隨走叫呼、不能止。里餘、爲犬所斃。

（たまたま道で出會い、黒犬は草の間から走り出てきた。鄭子は、任氏がたちまち地面に落ちて、元の姿に戻って南に走っていくのを見た。黒犬はこれを追いかけ、鄭子は付き従って走り呼び叫んだが、止められなかった。一里ほどで、犬に殺されてしまった。）

このように、鄭六は狐に戻った任氏を目撃し、その亡骸を葬った後、長安へ戻るのである。

また、②物事をよく見通すことができる點は、プロットの（2）や（5）に語られており、いずれも鄭六が登場する場面である。プロットの（2）では、任氏と鄭六が住まいを構える計畫をする際に、任氏は次のように述べている。

任氏曰「從此而東[8]、大樹出於棟間者、門巷幽靜、可稅以居。前時自宣平之南、乘白馬而東者、非君妻之昆弟乎。其家多什器、可以假用。」

（任氏は言った。「ここから東へ行き、大きな木が建物の間に生えているところが、通りも靜かで、借りて住むのによいでしょう。以前に宣平の南から、白馬に乘って東へ行った方は、あなたの妻のご親戚でしょう。あの家には家具が多いので、借りることができましょう。」）

「以前に宣平の南から、白馬に乗って東へ行った方」とは、韋崟のことを指しており、その「以前」のことは、プロットの（1）の中で次のように語られている。

至宣平之南、鄭子辭有故、請閒去、繼至飲所。崟乘白馬而東、鄭子乘驢而南、入昇平之北門。偶値三婦人行於道中、中有白衣者、容色姝麗。鄭子見之驚悅…

（宣平の南に至ると、鄭子は用事があると斷り、時間をもらって別れて、後から飲みの場へ行こうとする。崟は白馬に乗って東へ行き、鄭子は驢に乗って南へ行き、昇平の北門を入った。たまたま三人の婦人が道を行くのに出會ったが、その中に白い着物の者がいて、容姿は端麗である。鄭子はこれを見て驚きよろこんで…）

この場面の語りと、プロットの（2）の任氏が述べる內容を比べてみると、任氏の「物事をよく見通すことができる」能力が表現されていることが讀み取れる。まず、「宣平の南」から「白馬に乗って東に行った」者がいることについて、プロットの（1）での語り方は、任氏がそれを目擊したという語りになっていないうえに、任氏と韋崟は話の展開上でまだ面識がない。ただ、「白馬に乗って東に行った」ことは、鄭六が任氏に目をとめる前から、任氏が鄭六たちを見ていたとすれば知ることができる視覺的な情報である。しかし、その白馬の者が「あなたの妻のご親戚」であるとか、「あの家には家具が多い」といった私的な事情は、通常の人が一目して分かることではない。そのようなことまで知っているところに、狐妖任氏の物事を見通す力が表されていると言える。

また、プロットの（5）にも任氏の物事を見通す力が語られている。任氏は鄭六に、脚に傷のある馬を錢六千で買わせ、それを賣りに出すと錢三萬になると言い、實際に錢二萬五千で買う者がいたのである。これには裏事情があったことが後日談として語られている。

既而密問買者、徵其由、乃昭應縣之御馬疵股者、死三歲矣。斯吏不時除籍、官徵其估、計錢六萬、設其以半買之、

所獲尚多矣。

（馬が賣れてから、密かに買った者に問わせると、その理由が明らかとなったが、それは昭應縣の股に傷のある御料馬が、死んで三年になるのだった。その役人が馬の籍を除いておらず、役所がその馬の價格を明らかにし、錢六萬になるとのことで、その半値で馬を買っても、手に入る錢はずいぶん多いのだ。）

このように任氏は、御料馬についての知り得ることが難しい事情を知っていて、お金儲けに利用したのである。

以上のように、鄭六が登場するプロットでの任氏は、狐妖としての要素を多く現している。初めは鄭六の前に美女として登場して共寢をし、最後には、犬に追われて狐の正體を現してしまうところを鄭六に目撃されている。その間のプロットでも、物事を見通す力を發揮しているのである。

（三）韋崟から見た任氏の特徴

「說狐」の狐のイメージの③まじないを得意とする點に關しては、韋崟が登場するプロットの（4）や、韋崟と鄭六が共に登場する（7）に語られている。このことを次に確認していく。

プロットの（4）では、韋崟に生活費を出してもらっている任氏が、韋崟好みの美女との仲を取り持つことが語られている。刁緬將軍のお抱えの美女に手づるをつける方法として、巫女による占いを利用して果たしている。

初任氏加寵奴以病、針餌莫減。其母與緬優之方甚、將徵諸巫。任氏密賂巫者、指其所居、使言從就爲吉。及視疾、巫曰「不利在家、宜出居東南某所、以取生氣。」緬與其母詳其地、則任氏之第在焉。緬遂請居。任氏謬辭以偪狹、勤請而後許。乃輦服玩、并其母偕送于任氏。至則疾愈。

（當初、任氏は刁緬將軍の寵奴を病に罹らせて、針や藥でも治らない。その母と刁緬將軍は大變に心配して、巫女

に見てもらおうとした。任氏は密かに巫女に賄賂を贈って、自分の住んでいる場所を示させて、そこが吉方だと言わせるようにした。病を見るときになり、巫女は「この家はよくありません、ここを出て東南のある場所に住んで、生氣を取り戻すがよい。」と言った。緬とその母がその地を調べると、そこが任氏の住まいだったのだ。緬はそこで住まわせてもらうように頼んだ。任氏は狹いのでと嘘を言って斷ったが、丁寧に頼まれた後に許した。そこで衣裝や道具を車に載せて、その母と一緒に任氏の元に送られてきた。到着すると病は治った。)

まず、任氏は「刁緬將軍の寵奴を病に罹らせ」たとあり、具體的にどのような方法だったのかは語られていないが、何かのまじないを使ったのかもしれない。また、占い自體も任氏自らは行っておらず、巫女という人閒社會の風俗を利用し、巫女に賄賂を贈ることで自分たちに都合のよいように占いの結果を告げさせている。

プロットの(7)では、占いはさらに重要な意味を持っている。それは、任氏が狐に戻って死んでしまうストーリーにつながっていくからである。プロットの(7)では、鄭六が武官に取り立てられて、赴任先に任氏を伴って行こうとして頼むが、任氏は行きたくないと斷る。そこで、鄭六は韋崟にも頼んで二人で何度も說得し、最終的に任氏も同行することになる場面[9]である。

この場面について、周承銘氏、高雪氏「《任氏傳》主題新論[10]」に、次のような指摘がある。

細かく分析してみると、任氏の死の責任は鄭六だけにあって、韋崟には全くない。まず、鄭六の欲深さが任氏を死に追いやったのである。「夜を一緒に過ごす」という目的を遂げるために、鄭六は武官に徵用された機會を口實にして、「任氏に一緒に行こうと求めた(邀與任氏俱去)」のは、旅の途中で夜な夜な共寢の快樂を得るためである。……次に、鄭六が任氏の本來の姿を忘れていたことが任氏を死に追いやったのである。……任氏は韋崟の問い詰めによって、「だいぶ經ってから(良久)」なぜ西へ行きたくないのかという理由を話し出した。任氏の言い分に對して、小

説では、まず鄭六の心の中の世界の狀態を透視する形で「鄭子はたいへん夢中になっていて、他のことを考えずに（鄭氏甚惑也、不思其他）」とナレーションをし、これに續けて素描の手法で鄭六の外面や言語として現れた反應を「崟と大いに笑って『こんなに物の道理が分かっている人が、怪しげなものに惑わされて、どうしたことか』と言って、かたく賴む（與崟大笑曰「明知若此、而爲妖惑、何哉」固請之。）」と寫し取っている。任氏が躊躇って「だいぶ經ってから（良久）」やっと答えているのは、任氏に懸念があり、避けるところがあり、保留するところがあり、終始自分が「女妖」だという身分を明かしていないことを説明している。これには韋崟の責任を免れさせて鄭六の責任を際立たせるという作者の意圖がある。

周氏らは、鄭六の言動や心理に關する描寫を丁寧に讀み取って、任氏の死の責任が鄭六にあることを説明しており、その點に説得力がある。

しかし、この場面において鄭六と韋崟が一緒に任氏を説得しているが、韋崟に責任はないという見解に對しては、異論を示したい。むしろ、韋崟が一緒になって説得したことこそが、任氏が西行きへの同行を斷ることができなかった理由ではないだろうか。

韋崟が最初に任氏と出會ったのは、プロットの（3）で語られた場面である。鄭六の妾となった任氏がたいへんな美人だと聞いて韋崟は訪ねて行った。このとき任氏が狐であることを鄭六はすでに知っているが、打ち明けていないので韋崟は知らない。

韋崟は任氏の美貌に目がくらんで亂暴をしかかるが、任氏は拒み通した。そのときに任氏が述べた道理を韋崟は聞き入れて、以後手荒なことはしなかったことが語られている。道理を通し貞節を守る婦人としての任氏が表されている場面である。その場面で、任氏は「鄭六がかわいそうだ（鄭六之可哀也）」と述べる。韋崟が理由を尋ねると、任氏は次

のように答える。

「鄭生有六尺之軀、而不能庇一婦人、豈丈夫哉。且公少豪侈、多獲佳麗、逾某之比者眾矣。而鄭生窮賤、其所稱愜者、唯某而已。忍以有餘之心、而奪人之不足乎。哀其窮餒不能自立。衣公之衣、食公之食、故爲公所繫耳。若糠糗可給、不當至是。」

（「鄭生は身の丈六尺の體を持っていても、一人の婦人をかばうこともできないとは、一人前の男とは言えませんわ。あなたは若いときから欲しいままにして、多くの綺麗な人を手に入れてきたので、私に勝る者にたくさん會ったでしょう。けれども鄭六は貧しいので、よろしい相手は、ただ私だけです。餘裕ある心をお持ちになって、人の足りないものを奪うのを控えなさっては。鄭六は貧しくて自立できておらず哀れです。あなたの衣服を着て、あなたの食糧を食べているので、あなたに繫がれているだけなのです。もし粗末な食べ物でも足りていれば、こんなことにならないはずです。」）

こうした言葉に、韋崟は義侠心を覺まされて任氏に謝り、これ以降、任氏の生活費をすべて出している。

任氏は、鄭六が韋崟の世話になっていることを「あなたの衣服を着て、あなたの食糧を食べている」と指摘して、それが理由で韋崟の意向に從わなくてはならないことを述べている。この論法に從えば、任氏もこの後に韋崟に生活費を出してもらうことによって韋崟に從う者になったことになる。

以上のように、韋崟が登場するプロットでの任氏は、人間社會での規範を守る姿を現している。任氏は、初對面で韋崟が亂暴を働こうとした際に、道理を述べて身の貞節を守り、最後には、主人である鄭六や生活費を出している韋崟の意向に從った結果死んでいる。

したがって、プロットの（3）を踏まえると、プロットの（7）で任氏が凶方の西への旅に同行せざるをえなくなっ

たのは、鄭六が同行を頼んだことが理由ではあるが、實質的に生活費を出している韋崟が後押しをしたことがより強い理由になっていると言える。また、ストーリーの上で、鄭六と韋崟とでは、任氏が狐であることを知る時期に違いがあったことも、任氏の死へとつながる展開を招いている。

（四）鄭六と韋崟が見た任氏

本稿の始めに示した疑問は二つある。任氏が「狐」であるという怪異は、「任氏傳」にどのように物語として描かれているのだろうか。また、なぜ、美女任氏一人に對して、鄭六と韋崟という二人の男が設定されているのだろうかというものである。これまでに檢討した内容をもとにまとめる。

まず、鄭六は、任氏が美女であることやその美女を手に入れたことに滿足しており、任氏が狐であることを知ってはいても意に關していない。このことは、初對面の一夜から十日餘り後、再會した任氏が「知っていてなぜ近づくのか（公知之、何相近焉）」と鄭六に問うと、「知っていたとしても、何も心配はない（雖知之、何患）」と答えていることに端的に表れている。また本章の（二）ですでに確認した各場面にも、鄭六が目擊した任氏の行動には、人離れした知惠を持つ狐という特徴が多く現れていた。

一方の韋崟は、任氏が死んだ後に狐だと知ったが、交遊している閒は、任氏は人閒の美女だと疑うことはなかったのである。その鄭六から見た任氏は、道理を說き貞節を守り主人に從い、智惠や人脈を驅使して身内に利をもたらす婦人である。着物を縫わないことや、聰明なのに占いを信じるといった面もあったが、そうした面はあくまで人としての範圍で少し變わっていると感じられたのであった。

このように、對比して見てみると、鄭六は、任氏が狐と知ったうえで、「狐」の任氏とつきあっていたと言えるし、

韋崟は任氏を人だと思ったうえで、「人」である任氏とつきあったと言える。

さらに、鄭六が直接見聞きした狐としての任氏の面は、任氏の死後に鄭六から聞かされることで韋崟に共有された。これにより、任氏が着物を縫わなかったことや、占いの凶方にこだわったことが狐だったためなのだと、韋崟の直接見聞と結びつけて理解されたことになる。つまり、任氏の物語が終わった時點では、韋崟にとっても任氏は狐だったと振り返ることのできる存在になったのである。

「任氏傳」という物語は、鄭六と韋崟がそれぞれに體驗した任氏の「狐」と「人」の兩面を表現した物語である。任氏が「狐の化物」であることは、知識人である韋崟や沈既濟の直接體驗ではなく、鄭六という無教養の男が體驗した出來事として表現されている。一方で、任氏の人として優れた面は、韋崟の直接體驗として表現されているのである。

終わりに

「任氏傳」の語り手沈既濟が狐妖任氏について知ったのは、韋崟と交友があったためで、任氏の話の出所は一見韋崟であると讀み取れる。しかし、語られた內容と語りの視點を詳細に檢討したところ、任氏が狐であるという話の出所は、それを直接目擊して知っていた鄭六である。沈既濟が目擊者の鄭六から狐妖任氏の話を聞くのではなく、韋崟が鄭六から任氏が狐であることを聞いて知り、さらに韋崟から沈既濟は任氏が狐だったと聞き知るという傳聞過程を挾んでいる。

任氏という者は、二面性を持っており、二人の男がそれぞれに目擊したのである。つまり、鄭六は狐としての任氏と交流し、韋崟は人としての任氏と交流したのである。これによって、狐が美女に化けるという怪異の物語と、人にも優ると稱えるべき情を示した存在の物語が、一人の任氏という人物に集約されて表現されている。

任氏たちの物語を語り終えた後で、語り手は「ああ、人でない者の情が、人道にかなうのだ（嗟乎、異物之情也、有人道焉）」と任氏に對して感嘆していることから、任氏が狐であることは、「任氏傳」における重要な關心事であることが讀み取れる。このように「語り手」が「任氏傳」の終わりに述べる訓戒を導くまでの語りについては十分に述べ切れなかったため別稿としたい。

注

（1）「任氏傳」のテクストは張國風會校『太平廣記會校』（北京燕山出版社、二〇一一年）を使用した。

（2）周承銘、高雪「《任氏傳》主題新論」（『鹽城師範學院學報・人文社會科學版』三六―二、二〇一六年）七〇頁に、「任氏傳」の先行說を分類して一、風刺說、二、自喩說、三、愛情說とし、現在の多くの研究者が愛情說を支持していると述べている。

（3）六朝志怪の狐について、富永一登『中國古小說の展開』第四章第三節「狐說話の展開」（研文出版、二〇一三年）に詳しい。

（4）本稿における「物語論」は、ジェラール・ジュネットらによる物語の語りの理論を指している。

（5）「物語論（ナラトロジー）」の理論による。作中で起きたできごと（物語世界）を語り進める人。「作者」とは區別し、すべての物語は「語り手」によって語られていると考える。

（6）ジェラール・ジュネット著、花輪光、和泉涼一譯『物語のディスクール ―方法論の試み』（水聲社、一九八五年）。ジェラール・ジュネット著、和泉涼一、神郡悅子譯『物語の詩學 ―續・物語のディスクール』（水聲社、一九八五年）。

（7）鄭子如言訪其舍、而詣崟假什器。問其所用……崟乃悉假帷帳榻席之具、使家僮之惠黠者、隨以覘之。俄而奔走返命、氣吁汗洽。崟迎問之「有乎。」曰「有。」又問「容若何。」曰「奇怪也、天下未嘗見之矣。」……崟撫手大駭曰「天下豈有斯人乎。」遽命汲水澡頸、巾首膏脣而往。……崟周視室內、見紅裳出於戶下。迫而察焉、見任氏戢身匿於扇間。崟引出、就明而觀之、殆過於所傳矣。

（8）『太平廣記會校』は「從此而東、大樹出於棟間者」の部分の缺字を『太平廣記詳節』によって改め、「安邑坊之內曲、有小宅、宅中有小樓、樓前有大樹出於棟間者」としている。この異同について、佐野誠子「『任氏傳』の長安」（『中唐文學會報』（二一）二〇一四年）に詳しい。

(9) 後歲餘、鄭子武調、授槐裡府果毅尉……將之官、邀與任氏俱去、任氏不欲往……鄭子懇請、任氏愈不可。鄭子乃求崟資助、崟與更勸勉、且詰其故。任氏良久曰「有巫者言、某是歲不利西行、故不欲耳。」鄭子甚惑也、不思其他、與崟大笑曰「明智若此、而爲妖惑、何哉。」固請之、任氏曰「儻巫者言可徵、徒爲公死、何益。」二子曰「豈有斯理乎。」懇請如初。任氏不得已、遂行。

(10) 前揭注(2)七二頁。「但細加分析、任氏之死的責任却只在鄭六而不在韋崟。首先、是鄭六的貪欲害死了任氏。爲了達到〝專其夕〟的目的、他要借武調赴任之機、〝邀與任氏俱去〟、以便在旅途中體驗夜夜雙栖共宿的歡快。……其次、是鄭六忘記任氏的原形角色害死了任氏。……任氏在韋崟的追逼下、于〝良久〟說出其何以不欲西行的原因。面對任氏的說法、小說先是以旁白形式透視鄭內心世界的狀態、〝鄭氏甚惑也、不思其他〟繼之以白描手法摹寫鄭六形體語言的外在反應、〝與崟大笑曰：、明知若此、而爲妖惑、何哉、固請之。〟任氏猶豫〝良久〟才肯回答、說明她有顧慮、有回避、有保留、終始沒有公開自己的〝女妖〟身份、這是作者有意開脫韋崟責任而突出鄭六責任。